

ISSN 2189-2547

中部大学全学共通教育部紀要

JOURNAL OF THE FACULTY OF GENERAL EDUCATION
CHUBU UNIVERSITY

第3号(2017 年3 月)

VOLUME 3 MARCH 2017

Journal of the Faculty of General Education, Chubu University
Volume 3, March 2017

Contents

Papers

Narrative Theory and the Problem of Narrative Endings	Satoshi Nishimura (1)
Narrative Inquiry into Cooperative Learning	Tamami Wada (7)
Children with Pre- and Perinatal Memories—Three Japanese Cases	Ohkado Masayuki (13)
<i>Ardā Wirāz Nāmag</i> —Pahlavi Text and Japanese Translation—	Keigo Noda (29)
Scientific Viewpoints on the Rational Choice Theory	Kazumi Nishimoto (89)
The Characteristics of Participants in Water Fitness Program for Community-Dwelling Older Adults	Ayako Matsumura (107)
Contributor's guide	(121)
List of authors & Editor's note	(123)

誕生前・誕生時記憶を語る子供たち～日本における三つの事例

Children with Pre- and Perinatal Memories—Three Japanese Cases

大門正幸

OHKADO Masayuki

Since 1960s researchers of the Division of Perceptual Studies at the University of Virginia have been studying cases of the reincarnation type (children who claim to have past-life memories), and over 2,600 case data have been collected from all over the world. However, no case report of Japanese children with past-life memories had been reported in the academic literature until 2010, when, with the help of Dr. Ikegawa Akira, the present author investigated a case of a Japanese boy who claimed to have been a son of Scottish parents who owned a restaurant, the results of the investigation of which were published in 2011 in the *Mind-Body Science* journal in Japanese and in 2013 in the *Journal of the Society for Scientific Exploration* in English. Ever since the present author has been investigating many cases of the reincarnation type found in Japan. As argued in Ohkado & Ikegawa (2014) and Ohkado (2015), cases of the reincarnation type can be regarded as one type of a larger group of children with pre- and perinatal memories and they should be investigated as such. In this paper, from such a perspective, three cases with children claiming to have pre- and peri-natal memories will be reported.

Keywords: past-life memories, life-between-life memories, womb memories, birth memories, cases of the reincarnation type,

1. はじめに

1960年代から50年以上に亘っていわゆる再生型事例 (case of the reincarnation type、いわゆる過去生記憶を語る子供の事例) を収集してきたバージニア大学医学部知覚研究所には世界中から集められた2,600を超える事例が記録され、その多くは精力的に研究を進めてきた Ian Stevenson 博士、Jim Tucker 博士、Erlendur Haraldsson 博士、Jürgen Keil 博士、Antonia Mills 博士らによって書籍・論文といった形で報告されてきたが、その中に日本人の事例はなかった¹。2010年、筆者は胎内記憶研究の第一人者である池川明博士の助けを得てスコットランドの料理屋の子供だったという記憶を語る児童について調査を行い、その結果を

¹ Stevenson (1997)で報告されている Ogura 氏の事例を除く。この事例では当事者は早逝した兄とのつながりを示唆する母斑を持っていたが、過去生については語っていない。

2011年、人体科学会の機関紙において（大門, 2011）、またその後の進展も含めた調査結果を Society for Scientific Exploration の機関紙において（Ohkado, 2013）発表した。この事例をきっかけに筆者は過去生記憶を語る子供の調査を続けているが、過去生記憶を持つ子供は中間生記憶や胎内記憶、誕生時記憶を持つ子供との共通点が多いため、このような記憶を持つ子供たちを包括的に調査する必要性を訴え、実際にそのような調査を行ってきた（Ohkado & Ikegawa, 2014; Ohkado, 2015）。本稿では、そのうちの二つの家族、三つの事例について報告したい。

2. むーちゃんの事例

2.1. 概略

むーちゃんは2008年6月16日、建築業の父親と飲食業の母親の第一子として愛知県で生まれた女兒である。生まれた時から不機嫌なことが多く笑うことも少なかった。また、寝ない、おっぱいを飲まない、飲んでも左のおっぱいしか飲まない等こだわりが強く、育てにくい子供だったという。2歳になったばかりの頃、過労で父親が他界したため、その後、母親と二人で暮らしている。誕生時記憶、胎内記憶、中間生記憶、過去生記憶のすべてについて語っている。

むーちゃんが小学校に入学する直前の2015年3月31日、6歳の時に自宅で本人および母親と面談を行った。また、その後も母親とはメール・電話を通して何度かやり取りを行っている。面談時に本人は多くを語らなかったため、発言内容の多くは発言当時に母親が残した記録に基づいている。ただし、過去生記憶については、面談時に過去生での自分と父親の絵を描いてみせてくれる、などまだ記憶自体は残っているようであった。

2.2. 他界した父親について

子供が故人の姿を見るという事例は非常に多いが²、むーちゃんも父親の他界後、2歳で引っ越した時に、昼間、家の中から外に向かってニコニコ手を振って、「パパがいる。お目目三つあったよ」と言ったり、うどん屋で「パパがいた」と言うことがあった。

母親は霊的なものを信じる方ではなかったが、夫（むーちゃんの父親）の存在を感じることは何度かあったという³。

お通夜の前日、葬儀場に泊まり込んでいた時、他界した夫に向かって泣きながら「パパ、ママはなんでこんなに苦労ばかりする人生なんだろう？」と呟くと「パパは修行をやり

² Goode (2010) はそのような子供の特徴だけでなく、対処法などについても記している。

³ ウェールズで、伴侶を失った293人を調査した Ress 古典的な研究では、男性の50%、女性の46%が死別した伴侶の姿を見たと報告している。その後、より大きな規模で行われた調査でも同様の数字が得られている（Greeley, 1975; Haraldsson, 1985）。死別した伴侶との「再会」は死後交信（after death communication, ADC）と呼ばれるより大きな現象の一つである。死後交信については Guggenheim & Guggenheim (1996) を参照。

切ったんだよ。後はママの修行だよ」との返事が返ってきた。その時、「ああ、人生って修行だ、って聞いたことあるなあ。それにパパは、むーちゃんは小さいし、色々思い残しがあるのかな、とっていたが、やり切った感あるんだ、じゃあいいか」と気持ちが少し楽になったという。

また、むーちゃんが3歳くらいの時、アミューズメントパークなどに連れて行っても楽しんでくれず落胆して仏壇の前にいると「ママは期待するからがっかりするんだよ」と言われたことがあるという。

さらに、49日を迎えるまでは、例えば、夫の残した仕事の整理をしている時にトラックの鍵を探すとすぐ見つかる、といった具合に夫が助けてくれると感じることがよくあったとのことである。

2.3. 過去生記憶

3歳になったばかりのある夜、母親が運転する車の後部座席に座っていた時、突然「前のむーちゃんは落っこちて頭を打ってお空に行ったんだ。落っこちてどこに行こうかな、と思ったら降りるところがなくて頭をぶつけて、頭がぐちゃぐちゃになった。頭がぐちゃぐちゃになった時、おしっこしちゃったんだよ」と語った。この時点で、むーちゃん本人は飛行機に乗ったことはなかった。驚いた母親が「その時のむーちゃんは大きかったの？」と訊ねると「大きかったらおっこちないよ」との返事が返ってきた。夜の車中のことだったため、母親はその時はそれ以上訊ねることはしなかった。

その後、飛んでいる飛行機に気付き、「あ、飛行機！」と言うことが増えたが、しばらくして飛行機を見る度に「むーちゃん、パパと飛行機に乗ったことがある」、「前のむーちゃんは男の子だった。パパにおもちゃ買ってっていったけど、買ってもらえなかった」、「飛行機が壊れて、大人が直しに来た。でもパパは悪くないんだよ」（意味は不明）という話をするようになった。また、このような発言したある時、母親が「ママは？」と訊くと「ママはいなかった」との返答が返ってきた。

むーちゃんが4歳くらいの時、ある居酒屋でカウンターに飛行機のフィギュアが置いてあったのを見て母親が「ああ、飛行機だね」と言うと、「むーちゃん、パパと飛行機に乗った」と発言。「へえ、その時のむーちゃんってどういう名前だったの？」と聞くと、「なかじまたかひろ」と答えた。身近には「なかじま」という姓の人物も「たかひろ」という名の人物もいないので、知っている人物の名前を言ったわけではないとのことである。

図1は、面談時にむーちゃんが描いてくれた、過去生でのむーちゃんとパパである。



図1 過去生でのむーちゃんとパパ (6歳の時の絵)

2.4. 中間生記憶

中間生については、4歳の時に話し始め、5歳の時によく語った。頻繁に話した内容は「雲の上に行ったことがある。パパと。地球が動いていて、ちゃんと帰る時間を言わないと帰れなくなる。雲の上はごはんがいっぱいあって、ベッドもある。おきがえの服もある。地球は動くのと動かないのとある。むーちゃんはパパと地球を見てた。綺麗な色だよ。」というものであった。母親が「パパとどこに行ったの?」と聞くと「宇宙に行ったよ」と返

答することもあった（この時の「パパ」は前のパパなのか、今のパパなのかは不明）。その時、「地球」という言葉も知らないはずなのにと思った母親が「どうして知ってるのか」と尋ねると、「パパと見てた」という返事が返ってきた。

「母親を選んだ」とは言わなかったが、「お空からママを見てた」、「ママは仕事（飲食業務）をしてた」との発言は繰り返した。

父親について「ママがいない時にむーちゃんはパパとお空を見てた。パパはお空が好きだから、すぐお空に行ったんだよ。パパは羽根があつてお空へ行った。羽根にはたんぽぽとかチューリップとかお花がついていて、飛ぶと音がするんだよ。羽根がついているところに穴があいていて、そこを押すと音がする。ちょうちょとか色んな音がする」と発言したことがあった。

また、「（自分が）大きくなったらパパが返ってくる」という発言をしたこともあり、それを聞いた母親は「生まれ変わりってあるのかな、また帰ってくるのかな、だとしたらいいな」との感想を持った。

2.5. 流産に関連すると思われる発言

むーちゃんを身籠る前に母親は妊娠 3 ヶ月で流産をしているが、むーちゃんの出産予定日は流産の日と同じ 6 月 11 日であった⁴。4 歳のとき、流産については知らないはずのむーちゃんが、「一回お空に行ったけど帰ってきた」と発言したことがあり、母親は「流産した子もむーちゃんだったのかな」と感じたとのことである。

2.6. 胎内記憶

4 歳くらいの頃、胎内にいた頃のことについて何度も、「オレンジ色の枕があつて、真っ暗じゃなくて、あつたかい。黄色と青と白のヒモがあつた。お腹の中で逆さまに寝て、手と足を縮めていた」（布団の中で逆さまに寝て実演）と発言した。

また『崖の上のポニョ』の DVD を観ていた時、「むーちゃん、お腹の中では魚だった」と述べた。

妊娠中に母親がいわゆる「体によくないもの」を食べたり飲んだりした場合、生まれた子どもがそのことについて否定的な発言をすることがある、という話を聞いていた母親が「（お腹の中にいた時、お母さんが食べたもので）おいしいものとかまずいものとかあつた？」と訊いたところ、「おいしいのがでてきたよ」との返事が返ってきて安心したという。

また、難産だったため「なんでなかなか出てきてくれなかったの？」と訊いたら、「（おなかの中は）気持ちよかつた」との返事が返ってきた。

2.7. 誕生時記憶

おそらく 4 歳の時、体をくねらせながら「おふとんのトンネルみたいにして、こうやっ

⁴ このような死と誕生に関する共時的な現象については市川 (2010, 2014) を参照。

て出てきたんだよ」と発言した。出産自体は 31 時間を要した難産で陣痛促進剤が使われたが、出産自体に対して否定的な発言をすることはなかった。

2.8. 生まれてきた目的

面談時に「むーちゃん、地球には何しに来たの?」と訊ねると「遊びに来たの」との返事が返ってきた。胎内記憶研究の第一人者で産科医の池川明博士は「人生テーマパーク論」を提唱しているが、それを思わせる発言である (池川, 2014; 226-233)。

3. あいりちゃん・ゆめりちゃんの事例

3.1. 概略

あいりちゃんは 2002 年 10 月 3 日に、ゆめりちゃんは 2005 年 10 月 17 日に、石川県で会社員の父親と保育士の母親の元に生まれた。あいりちゃんは中間生記憶と胎内記憶および誕生時記憶を、ゆめりちゃんは過去生記憶と中間生記憶を語っている。

2015 年春、母親が記録していた日記の記事や動画などの資料を送ってもらい電話でインタビューを行った後、2015 年 8 月 10 日、自宅にて本人 (あいりちゃん中学校 1 年生、ゆめりちゃん小学校 4 年生) および母親と面談した。また面談後に食事をした際に父親からも話を聞いた。

3.2. あいりちゃんの胎内記憶・誕生時記憶・中間生記憶

あいりちゃんは言葉の発達が大変早く、8 ヶ月くらいから話し始め、2 歳の頃には「大人と話をしている」と母親に感じさせるほどであった。

2 歳のある日、母親と二人でお風呂に入っていた時に「お母さんのおなかの中ってどんなだった?」ときりげなく聞いてみると、「気持ちよかった!!」、「あったかかった!!」との返事が返ってきた。さらに「こうやって、こうやって曲がるストローみたいに曲がって、こうやって、こうやって回って出てきたら明るかった!!」と誕生時記憶についても話をした。

また 3 歳か 4 歳の頃、入浴中に「お空でゆめりちゃんとハートになってつながっていた」、「家族 4 人が四葉のクローバーのようにつながっていた (ハートの形につながっていた二人を両親が挟むような形)」、という話をした。

2 歳くらいの時、母親が落ち込んでいると、「おかあさんの口から真っ黒なものが出てる。おかあさんの心、真っ黒だよ」と言ったことがあった。また、幼少の頃から、壁に向かって一人で話をしたり、話しかけても目を合わせないことがあった。2015 年 (中学一年生) になり、家族内で中間生記憶や過去生記憶の話題がよく出るようになって、「そう言えば、私、小さい頃、よく光の玉を目で追ってたことは覚えてるけど、お母さん達が話しているのって、そういうこと? それならよく覚えてるよ」と発言した。

また小学校1年生の時に同じマンションの上に住む家族の父親が急死した時、亡くなった父親があいりちゃんのところに来て残していった家族に向けたメッセージを伝え、それをあいりちゃんが家族に伝えに行く、ということがあった。この父親は生前、関西方言を話していたが、あいりちゃんがメッセージを伝えるときも本人が知らないはずの関西方言だったという。この父親からのメッセージは49日を迎えた日、「これでおわかれだよ」という挨拶があつて途絶えた。あいりちゃんに49日のことなど伝えてはいなかったため、母親は「49日にあちら側に帰ると言われているのは本当なんだ」と感じたとのことである。それ以来、あいりちゃんが一人で話をしたり、見えないものが見えているような様子を示すことはなくなった。面談時には、赤い玉が浮かんでいて、声が聞こえてくる感じだったことは覚えているが、それ以外のことは忘れたとのことであった⁵。

3.3. あいりちゃんが見たおなかの中のゆめりちゃん

あいりちゃんが2歳4ヶ月の時、「ずる〜い!! あいちゃんもおなかの中に入りたい!!!」と言って母親の洋服をめくり、もぐりこもうとした。同じことを何度か繰り返したが、その数日後、妊娠の兆候を感じた母親が検査をしてみると陽性であった。胎内の様子が見えたのかも知れないと思った母親が「お母さんのおなかの中に何か見えた? 描いてみて」と頼むと自分からピンクと赤のペンを選んで図2の絵を描いた。図2では、右が母親、左が胎内の妹である。また、母親の周りには当時あいりちゃんに見えていた光の玉が三つ描かれている。

⁵2016年12月17日、あいりちゃんがメッセージを伝えに行った女性に電話で話を聞いたところ、事実関係はその通りであった。ただ、あいりちゃんの所に来た理由の一つは、あいりちゃん宅に当時5ヶ月だった第三子(女兒)を預けることが多かったからではないか、とのことであった。メッセージの詳しい内容について記憶は薄れていたが、あいりちゃんが他界した夫と話をしていた、という点については確信を持っていたとのことである。



図2 あいりちゃん（2歳4ヶ月）が描いたおなかの中のゆめりちゃん

3.4. ゆめりちゃんの気質

ゆめりちゃんは幼少の頃から常に穏やかな笑みを浮かべており、祖母の友人が顔を見るだけで癒される、と言って姿を見に来るほどであった。物静かで全てを達観したかの様子は筆者が面談時に受けた印象でもあった。

あいりちゃんが早くから言葉を話し始めたのとは対照的に、ゆめりちゃんは言葉を発するのが遅く、最初の発語は1歳8ヶ月の時であった。父親が研修で不在のことがあり、その晩、何度も「おとうさん」と言って一晩中泣いたため、言葉が話せることを知って母親は大変驚いた。

小学校に入学したばかりの頃、「お母さん、なんか目がぼやっとする。なんか人の周りに影みたいなのが見える」と言い出した。いわゆる「オーラ」のことではないか、と感じた母親が詳しく訊いてみると、人の周りに「透明」から「黒」の範囲でオーラが見えるようで、その人の体調がいい時には「透明」だが悪い時には「黒」、中間として「灰色」や「白灰色」に見えるという返事が返ってきた⁶。母親によれば、ゆめりちゃんが見るオーラの色

⁶ 生体の周囲に光の層のようなものが見えると主張する人が数多く存在するのは事実である。筆者自身も「オーラを見るエクセサイズ」を通して一時的にそれらしい物が見えるようになったことがある。ただし人によって様々な色が見える、という場合もあれば、ゆめりちゃんのように色彩は見えない場合もあり、両者が同一のものなのかは分からない。*The Skeptic's Dictionary* (Carroll, 1994) の“aura”

と、心の状態はよく対応しているようであるとのことである。また、ごくまれに「こうみよう（光明）」が見えると言うこともあるそうである⁷。面談時に母親および筆者のオーラの色について訊ねたところ、いずれも「透明」とのことであった。

幼少の頃から非常に感受性が強く、一種のハイリー・センシティブ・パーソン（Highly Sensitive Person, HSP）的傾向を示した⁸。たとえば、小学校2年生の時、泣いて学校から帰ってきた。母親が理由を訊ねると次のように答えた。男の子が踏み潰した蟻を気の毒に思い拾って巣に戻してやったが、その後、自分が戻したと思った巣が踏み潰された蟻の巣ではなかったかも知れないことに気づき、蟻に対してとても申し訳ないことをした、と。そしてその後一時間ほど泣き続けた。

またある遠足の日、楽しくなかったと言って帰ってきたので理由を訊くと、電車の中で騒いでいた男の子達に対して先生がどなったので、同じ車両に乗っていた人たちの楽しい気持ちが損なわれてしまって悲しかったという返事が帰ってきた。

またある時、筆箱のかけらを握りしめ、泣きながら帰ってきたことがあったが、話を訊くと、落とした時に壊れてしまったとのことで「ごめんなさい、筆箱さん！」と言ってしばらく泣いていた。

神仏に対する思いは大変深く、不機嫌になった母親が勢いに任せて「(この世には) 神も仏もない」といった発言をすると、「お母さん、今何言った？ 神様にそんなこと言えないでしょ！」と咎めることがあった。

3.5. ゆめりちゃんの過去生記憶と中間生記憶

ゆめりちゃんが6歳の時の夏、夜の9時頃、久しぶりに里帰りした母親が、あいりちゃん、ゆめりちゃんと三人で川の字になって寝転んでいた時のことであった。あいりちゃんの出産で里帰りをした時、同じ部屋で子守唄としてよく歌っていた「大きな古時計」を口ずさみはじめた途端、ゆめりちゃんが号泣し始めた。何かに訴えるように激しく泣きじゃくる姿は別室にいた祖母が慌てて駆けつけるほどであった。大変なことが起こったのではないかと心配する母親に対して、ゆめりちゃんは泣きながら次のように述べた。

お母さんが火曜日に死んで、お父さんは悲しすぎて記憶がなくなって・・・悲し過ぎて病院に行って、泣いて死んでしまった。そして神様がゆり（過去生での名前。後に

の項目ではオーラが見えるという現象は共感覚（synesthesia）の一種ではないか、という見解が示されている。

⁷ 「こうみよう（光明）」は特に心が光輝いている時に見える色であるとのことである。ゆめりちゃんが初めて「こうみよう」という表現を使ったのは、母親の友人が来て生き生きと話している様子を見た2014年のことであるが、母親にも馴染みのなかった仏教用語であり、意味が分からず辞書で確認して「光明」を意味しているのもであろうということが判明した。

⁸ Elaine Aeronの一連の研究（Aeron, 1996; 1999; 2000; 2002など）を参照のこと。ただし、ゆめりちゃんが示す感受性の高さは主に霊的な次元であり、感覚処理（sensory processing）のレベルで説明できるものであるのかは疑問である。

「まっはしゆり」だったと語った)、お願いがあるんだけど、みんなが笑顔で暮らせる家を探しなさいって言った。神様が泡になって消えた時、金色の光がさして、光の中から声が聞こえてきた。大きなのっぽの古時計が聞こえてきた。天使たちに最後に元気でねって言われて、天から宇宙へ、宇宙から天へ・・・天から宇宙へ・・・そして宇宙から地球へ。(地球に生まれてくるか迷ったとのこと) その歌は神様(過去生の母親)が(過去生のゆめりちゃんが)小さい時に歌っていた歌だから、聞こえてきた時に泣いてしまった。金色の光がまた出て、大丈夫だよ、大丈夫だよ、って聞こえてきたから、一回天に戻って、天使に囲まれてその歌を歌ってくれた。ゆめりも天使になって、宇宙から地球へ、そしておなかへ入った。」

また、この時、母親に対して「お母さんはずっと神様に可愛がられてきた人だよ」と語った。

この出来事以来、ゆめりちゃんは「前のお母さんに会いたい」と訴えるようになったが、母親はどう対処していいか分からず、泣きじゃくるゆめりちゃんの背中を撫でながら「会いたいね、会いたいね」と慰める日が続いた。

2週間ほどしたある日、いつものように母親が慰めていると、母親の顔を見てわれに返ったような表情になり、「お母さんだ!」と泣きながら母親に抱きついた。過去生で先立たれた母親が今の母親だということを確認した瞬間であった。

その後、過去生のことを話すことはなかったが、7歳の時、次のような出来事があった。保育園の年長から習い始めたピアノのレッスンがあったその夜、布団の中で添い寝をしている母親に対して「あ～あ、今のピアノの先生は優しくてよかった。前の先生は、ちょっと間違えただけで、帰りなさい!! って怒ったもん」と述べた。ピアノの先生は当初から変わっていないので、過去生で習っていた先生と比べてという意味であろう。

母親によれば、ピアノの上達がとても早く先生にもよく褒められるとのことである。過去生記憶を持つ子供が、過去生と関係する技能を示すことはよくあるが、ゆめりちゃんのピアノもそのような例なのかも知れない⁹。

同じく7歳の時、小学校2年生のゆめりちゃんは、毎朝、登校するときに「お母さん、行ってきます、行って来るね、行ってきます、気を付けるね」という台詞を姿が見えなくなるまで延々と繰り返すようになった。不思議に思った母親が「ゆめりは神様に何と言って生まれてきたの?」と訊ねると「お母さんを助けたいので、心配しないでください。人間界へ行きたいです。よろしくお願いします、って」という返事が返ってきた。

2014年夏に石川県で開催された、胎内記憶をテーマとした映画『かみさまとのやくそく』

⁹ Stevenson (1997, 314; 2001, 186-187, 235-236) 参照。モーツァルトのような天才児 (child prodigy) が過去生記憶で説明可能かという点について、Ian Stevenson は、可能性に言及しながらも、過去生記憶を持つ天才児の事例は見つかっていないためそう結論づけるのは時期尚早であると述べている。しかし、Tucker (2013) はプロゴルファー (ボビー・ジョーンズ) の過去生記憶を持っており、ゴルフに驚異的な才能を示した男児の例を報告しており、天才児が過去生記憶によって説明できる可能性は高くなったと言えるであろう。

(萩久保監督, 2013) の上映会において、母親がスタッフとして参加した際、あいりちゃんとゆめりちゃんに「生まれてくる前にかみさまと約束したこと、覚えてる？」と訊ねたところ¹⁰、11歳のあいりちゃんは「そんなの覚えていない」との返事を返したが、8歳のゆめりちゃんは図3を描いて母親に手渡した。産科医の池川明博士が報告している、胎内記憶を持つ多くの子供達と同様に、ゆめりちゃんも自分の使命を明確に自覚していることが分かる文面である。

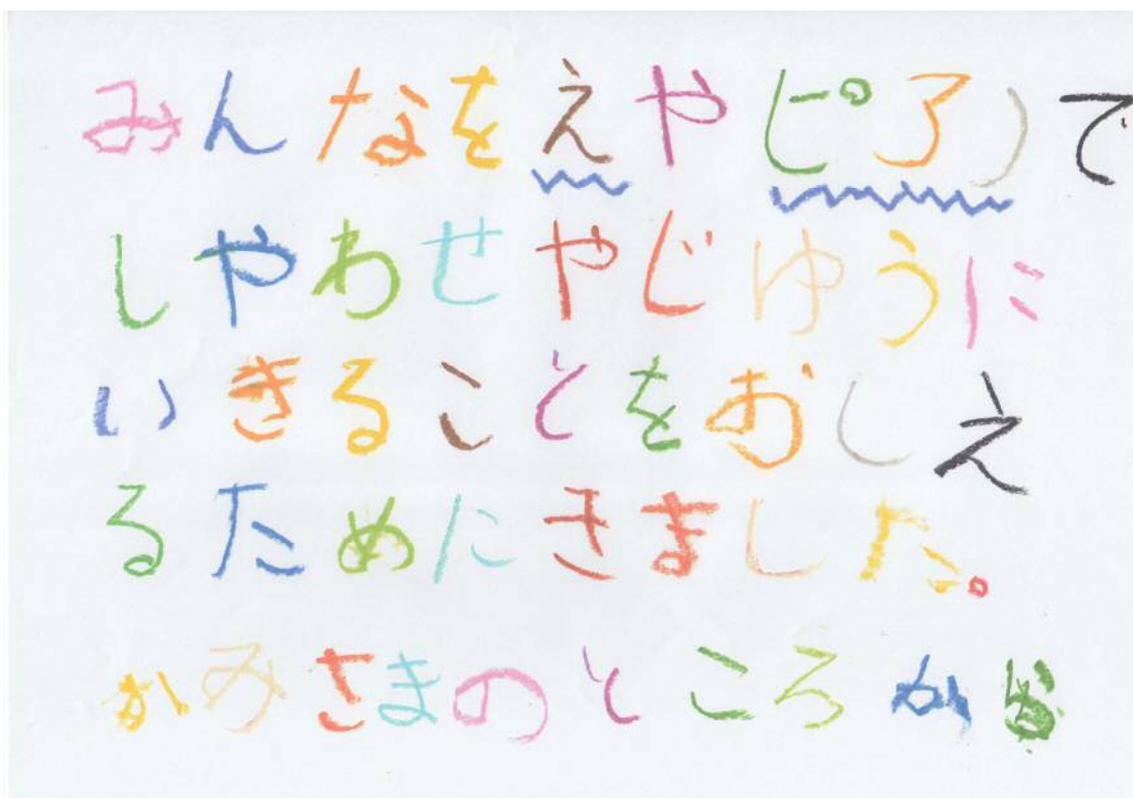


図3 ゆめりちゃん(8歳)が描いた「かみさまとのやくそく」

過去生記憶および中間生記憶について面談時にゆめりちゃんに訊ねたところ、過去生記憶については覚えていないが、中間生記憶については図4の絵を描いて次のような説明をしてくれた。

空(中間生)では光の玉が2列に並んでいて、亡くなった人たちは違う場所にいるが、姿は見える。生まれようかどうしようか迷っていたが、大砲のようなもので打たれて

¹⁰映画の中の「かみさまとのやくそく」とは、人が生まれる前に大いなる存在と相談して人生の目的・使命を決定することを指している。池川明博士が報告しているように、そのように語る子供が数多くいることは事実であるし、科学的実験に協力的で本人が知らないはずの故人に関する情報を入手できる、という意味で実力のあるアリソン・デュボアやジョージ・アンダーソンのような霊媒も同様の内容を述べている(大門, 2015; 269-272)。

飛んできた。なぜ迷っていたのかは覚えていない。(母親の解釈:生まれてくこと自体を迷っていたのかかもしれない)。大砲のところにはたくさんの天使がいた。

なお、面談時には「お母さんを守るために生まれた」、「みんなを幸せにするために生まれた」と語っていたことは覚えていなかった。

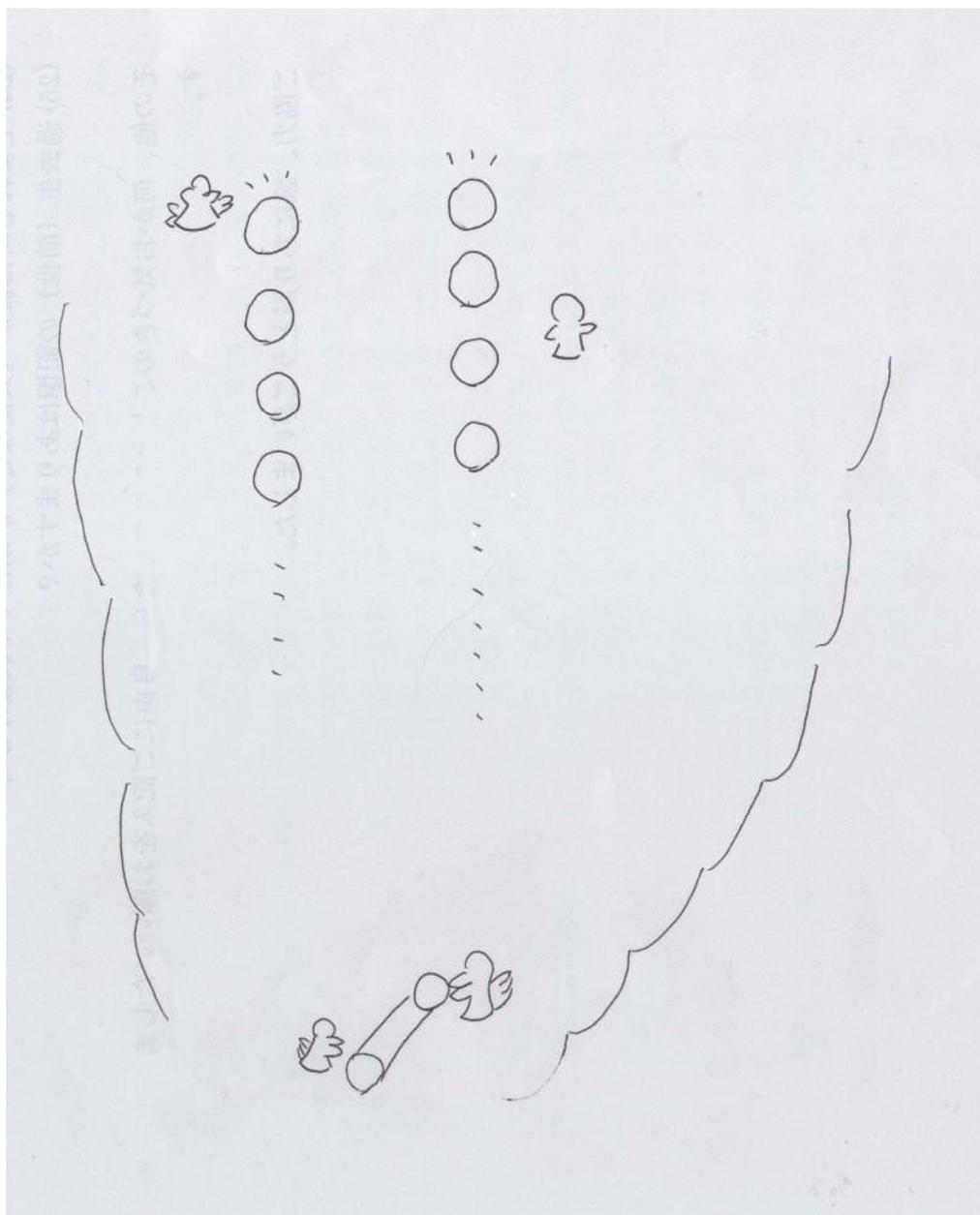


図4 面談時にゆめりちゃん(9歳)が描いた中間生の絵

3.5. ゆめりちゃんによる母親への助言

2013年11月14日、ゆめりちゃんが8歳の時、気分が落ち込むような出来事があって沈んでいる母親に対して、突然、次のような助言を語った。

お母さんは自分の心と自分の気持ちを伝えられなくて困っている。自分が苦しんでいるのを人と同じにしてしまっていて困っている。どうやって止めるかの方法はわかったけど、どうやって・・・って・・・って自分の心の糸をほどくかがわかっていない。糸はほどけたけど気持ちがおさまらない。やっと神様に逢えた。それがお母さんの第一弾の方法を解いていく鍵。

神様は、なんで神は愛なりって言うかはね、神様は人を愛でいっぱいさせたり、人に愛を配っているんだよ。それをお母さんはよけている。自分の心・・・悪の気持ちだけよけていない。悪に心を刻まれてパズルになっている。どうやって悪から天に目覚めることができるんだろうね？ それは今考えて困っているし、どうして自分が自分の道を選べないのに子どもを育てることができるのか、だよ？ 困っていることは？ それはどうして自分を大切にできないか？ 迷っているんじゃないかな？ 自分の気持ちを大切にできれば糸はほどけるよね。自分を縛り付けて悲しませたら、糸はもっときゅーってなって心が痛くなるよね。

僕（当時、ゆめりちゃんは自分のことを「僕」と呼んでいた）の天に行ったお母さんは、まゆみさん（母親の名前）と同じで、性格で、学校に行ったらいじめられていたけど、お母さんに言えなくてとっても悩んでいて、いたんだけど、その時に死んでしまったんだよ。僕が自分の道を選んでいないのに、自分のせいにしてしまったのを見て、悲しんで、まゆみさんと同じで、あ～あ、私がお母さんじゃなければ、と思って死んでしまったっていう・・・

それでね、死んだ人はお墓に入れられるよね？ それに神様は透明な袋に包んで天に送る。だけど私のお父さんはそれを追いかけて海に泳いでいったの・・・だけど見失って、帰り道もなくなって、ごはんを食べずに死んでしまったっていう・・・

昔の人はって言うと、話ができたんだよ、自分の心とも。どうして話ができたっていうのは、自分の心を自由にしてやってるから。お母さんは縛り付けてるっていう、キリスト教で見たけど、小さなリースみたいに人は気に入らなくて、お母さんだったら心が気に入らなくなってしまう。それで牢屋に入れられて、そしたら自分の心が死んでいくんだよ。それだったら、ほかの人はお母さんの行動を見てどうやって（どうだと）思う？ それが自分で考えるところじゃない？ ヒントはたくさんあげるけど、自分で考えないと。本当にどこで自分が心を苦しめてるかわからんから、その力を付けるためにヒントはあげるけど、考えてみて・・・

ゆめりちゃんがこの発言をし始めた時、母親が慌てて携帯電話で録画をしたので、その時の動画が残っている。筆者も視聴したが、大変落ち着いた様子で、いい聞かせるように

語っている姿が非常に印象的であった。

4. 考察と結語

以上、見たように、あいりちゃんは中間生記憶・胎内記憶・誕生時記憶を、ゆめりちゃんは過去生記憶と中間生記憶を、そしてむーちゃんはその全てを語っている。このことは Ohkado & Ikegawa (2014) や Ohkado (2015) で述べた、誕生前および誕生時記憶を一括して考察する重要性を再確認させてくれているように思う。むーちゃんとゆめりちゃんが過去生記憶について語ったのがいずれも夜の入眠に近い状態であったと考えられることや、あいりちゃんが胎内記憶を語ったのが入浴時であったことは、Ohkado (2015) で明らかにした、「誕生前・誕生時記憶を語りやすいのは寝る前・入浴時・食事時」という傾向と合致している。また、今回の二つの事例、すなわち、むーちゃん事例とあいりちゃん事例において、死後交信 (after-death communication, ADC) が生じている点は注目に値する。今後も、同様の事例の記録・分析を継続し、さらにその特徴を明らかにしていきたい。

謝辞

本研究は中部大学倫理審査委員会の承認を受けて実施したものです (課題名: 出生前記憶を語る子どもの実態に関する研究 承認番号: 260100)。

本調査に協力してくださったむーちゃんとお母様、あいりちゃんとゆめりちゃん及びご両親、お母様のご友人に心から感謝申し上げます。また、本研究に助成をしてくださった Helene Reeder Memorial Fund for Research into Life After Death にも感謝申し上げます。

参考文献

Aron, Elaine (1996) *The Highly Sensitive Person: How to Thrive When the World Overwhelms You*. New York: Broadway Books.

Aron, Elaine (1999) *The Highly Sensitive Person's Workbook: The Practical Guide for Highly Sensitive People and HSP Support Groups*. New York: Broadway Books.

Aron, Elaine (2001) *The Highly Sensitive Person in Love: Understanding and Managing Relationships When the World Overwhelms You*. New York: Broadway Books.

Aron, Elaine (2002) *The Highly Sensitive Child: Helping Our Children Thrive When the World Overwhelms Them*. New York: Broadway Books.

Carroll, Robert T. (1994) *The Skeptic's Dictionary*. <http://skepdic.com/> (2016年11月16日アクセス)

Goode, Caron B. (2010) *Kids Who See Ghosts: How to Guide Them Through Fear*. Newburyport, Mass:

- Samuel Weiser.
- Greeley, Andrew (1975) *The Sociology of the Paranormal: A Reconnaissance*. Beverly Hills: Sage Publications.
- Guggenheim, Bill and Judy Guggenheim (1996) *Hello from Heaven!: A New Field of Research (After-Death Communication) Confirms that Life and Love Are Eternal*. New York: Bantam Books.
- Haraldsson, Erlendur (1985) “Representative National Surveys of Psychic Phenomena: Iceland, Great Britain, Sweden, USA and Gallup’s Multinational Survey,” *Journal of the Society for Psychical Research* 53(801), 145-158.
- 市川きみえ (2010) 「神秘的な出産体験からみた生命誕生における霊魂のむすび」『人体科学』19(1), 55-68.
- 市川きみえ (2014) 『いのちのむすび—愛を育む豊かな出産』京都：晃洋書房.
- 池川明 (2014) 『前世を記憶する日本の子どもたち』東京：ソレイユ出版.
- 荻久保則男監督 (2013) 『かみさまのやくそく～胎内記憶を語る子どもたち～』（映画）.
- 大門正幸 (2011) 「『過去生の記憶』を持つ子供について～日本人児童の事例～」『人体科学』20巻1号、33-42、ページ、2011年.
- Ohkado, Masayuki (2013) “A Case of a Japanese Child with Past-Life Memories,” *Journal of Scientific Exploration* 27(4), pp. 625-636, 2013.
- Ohkado, Masayuki (2015) “Children’s Birth, Womb, Pre-life, and Past-Life Memories: Results of an Internet-Based Survey,” *Journal of Prenatal and Perinatal Psychology and Health* 30(1), 3-16.
- 大門正幸 (2015) 『なぜ人は生まれ、そして死ぬのか：過去生記憶・臨死体験が示す人生のほんとうの意味』東京：宝島社.
- Ohkado, Masayuki and Ikegawa, Akira (2014). “Children with Life-Between-Life Memories,” *Journal of Scientific Exploration* 28(3), 477-490.
- Stevenson, Ian (1977) “The Explanatory Value of the Idea of Reincarnation,” *The Journal of Nervous and Mental Disease* 164(5), 305-325.
- Stevenson, Ian (1997) *Reincarnation and Biology: A Contribution to the Etiology of Birthmarks and Birth Defects* (2 vols.). Westport, CT: Praeger.
- Stevenson, Ian (2001) *Children Who Remember Previous Lives: A Question of Reincarnation, Revised Edition*. Jefferson, NC: McFarland.
- Tucker, Jim B. (2013) *Return to Life: Extraordinary Cases of Children Who Remember Past Lives*. New York: St. Martins.